

親の育児ストレス軽減および養育性向上を促す観点と支援プログラム構築に関する一考察

寺見 陽子

神戸松蔭女子学院大学人間科学部

Author's E-mail Address: y-terami@shoin.ac.jp

The development of a framework for the creation of a parenting support system to alleviate parenting stresses and improve parenting skills

YOKO Terami

Faculty of Human Sciences, Kobe Shoin Women's University

Abstract

本研究は、筆者が、これまでに行った3歳以下の子どもを持つ母親への意識調査から明らかになった、育児ストレスの規定要因、構造、要因間の関連に関する結果をもとに、支援プログラムの観点と支援プロセス・モデルを構築することを目的とした。その結果育児ストレス軽減と養育性向上には、母親自身の親のイメージ転換、コミュニケーションスキル、子どもの発達に関する知識・共感的なかわりの技術、葛藤状況における感情統制力とコーピング方略、将来的見通しなど、母親自身の過去・現在・未来の再統合による自己の再生成を図る枠組みが示された。このことは、父親にも適用できることも示唆された。

The research reported in this paper was carried out to determine the components of the structure and evaluation of parenting programs. We analyzed existing research on how mothers with children under 3-years-old feel about parenting, and based on the results, identified the elements and overall structure of parenting stress, and their interrelationships. We established a framework for the development of a parenting support system and its evaluation, together with a support process model.

It is proposed that in order to alleviate parenting stresses and improve parenting skills, it is important for mothers to restore themselves by reintegrating their view of their own past, present and future. In this way, they will be able to develop the ability to control their emotions under stress. The same can also apply to fathers.

キーワード：育児ストレスの構造、育児ストレス関連要因の構造、支援の観点、支援プロセス・モデル
Key Words: The structure of parenting stress, the structure of factors relating parenting stresses, the view points of constructing support program, support process model

はじめに

現代社会における少子化・核家族化の進行は、地域や家庭の養育力・教育力の低下を招き、日本全体の課題として、さまざまな少子化対策が展開されてきた。その基本は、家庭や地域の子育て力の向上とともに親としてのアイデンティティや養育性の形成にある。また、育児を実践する力の育成も求められている。本稿は、養育者のストレスを軽減し、養育性を向上させる実践的なプログラムの観点と支援プログラムモデルについて検討するものである。

1. 本研究の趣旨

今日、幼稚園や保育所、認定こども園等の保育現場では、園児の保護者や地域の子育て家庭を対象に、保育の場の特性や保育者の経験知・専門性を活かし、カウンセリングやソーシャルワーク等の知識や技術を援用した支援が展開されている。そうした支援は、直面した課題の解決だけでなく、親としての養育性やアイデンティティ形成を促す開発的・促進的な意義をもっている。子育て支援の質を向上させる取り組みを進めるには、その実践における意義や成果を問直し、活動を見直す観点が重要になる。また、親としての資質や養育性の向上を促すためには、保育の場で可能な方略とその適宜性を評価する観点も明確にしていく必要がある。相互的なかわりが、次世代を担う子どもだけでなく、そこに参与する人々のそれぞれの自己形成にどのような影響を与えていくのか、「育てられるものから育てるもの」への親のアイデンティティの質的転換と育ち育てられるという「育ちの相互性及び循環性」(鯨岡、2011)を生涯発達の観点から検討する必要があると思われる。

そこで、本研究では、筆者と共同研究者が行った研究結果を踏まえ、今日行われている子育て支援の実践を構造化し、育児ストレスを軽減し養育性の向上を促す観点の明確化と支援プロセス・モデルの構築を試みたい。

2. 育児ストレスの構造

(1) 育児不安とストレス

育児不安とは、子育てへの否定的感情の事である。子育てをする上で、ちょっとした心配や困ったこと、不安なことといった些細なものから育児ノイローゼように強度な不安状態も含め(大日向、2002)、子どもの成長発達や自分自身の子育てへの悩みや迷いから、結果的に子育てに適切に関われないほど強い不安を抱いている状態をいう(長坂、2002)。「育児行為の中で一時的あるいは瞬時的に生ずる疑問や心配ではなく、持続し、蓄積された不安の状態」(牧野、1982)である。一方、育児ストレスは、「子どもや育児に関する出来事や状況などが、母親によって脅威であると知覚されることやその結果母親が経験する困難な状況」(佐藤、

1994) を指す。親業に携わる状況においてなされる一連の評価の結果引き起こされるものであり (Abindi, R.R, 1992)、「脅威的・否定的評価の結果生じ、乳幼児の育児の軽微な日常的混乱の累積によって引き起こされる」(田中、1994) ものである。

(2) 育児ストレスの構造

筆者ら (寺見・南、200a, b, c, d., 2008) は、そうした育児不安や育児ストレスを持ちやすいのは、3歳児以下の子どもを持つ母親であることから、3歳児以下の子どもを持つ母親を対象に調査を行った。調査項目は、①母親の属性-年齢、仕事歴、家族構成 (親数、子ども数)、出産形態と状況、祖父母の同居の有無、住居形態、転居経験、居住地域、②育児環境 (8項目)、③妊娠経験 (14項目)、④出産経験 (12項目)、⑤育児ストレス (62項目)、⑦子ども像 (19項目)、⑧育児サポート (23項目)、⑨地域活動参加 (14項目)、⑩成育経験および母親の親の養育態度 (27項目)、⑪愛着・不安傾向 (31項目)、⑫子育て情報 (14項目)、⑬子育て支援活動の周知度・利用度 (13項目)、⑭子育てに関する気持ち、である。

表1は、それらの項目から抽出された因子を一覧にしたものである。

これらのうち、育児ストレスを従属変数にして、他の因子との関連を探ったところ、母親の育児ストレス因子としては、「育児充実感」、「育児拘束感」、「育児当惑感」、「夫との不一致」の4因子が見出され、母親の親からの「非受容的養育」→「母親の回避的な愛着」→「育児拘束感」→「育児拘束感」という構造が見出された (図1)。また、それらの育児ストレス因子は、母親の親との良好な関係、母親の父親の存在感、夫の協力・育児参加、友人や専門機関・医療機関・地域支援活動のサポートに規定され、特に母親の父親との良好な関係が、夫の協力や親・友人からの情報、地域活動の負担感と関連し、それが、育児拘束感、育児当惑感に影響を与えていた (図2)。

表1 抽出された因子

因子名		因子名	因子名	因子名	
育児 ストレス 因子	第一因子	育児充実感 (CS1)	育児 サポート 因子	第三因子	心気型 (se3)
	第二因子	育児拘束感 (CS2)		第四因子	非受容型 (se4)
	第三因子	育児当惑感 (CS3)		第五因子	回避型 (se5)
	第四因子	夫との不一致 (CS4)		第一因子	夫の理解・協力 (S1)
成育因子	第一因子	拒否的な養育 (ch1)		第二因子	専門機関 (S2)
	第二因子	厳格な養育 (ch2)	第三因子	夫の親 (S3)	
	第三因子	受容的な養育 (ch3)	第四因子	自分の親 (S4)	
	第四因子	両親・父親との関係 (ch4)	第五因子	夫の参加度 (S5)	
	第五因子	子どもの世話 (ch5)	第六因子	近所の人 (S6)	
	第六因子	過保護な養育 (ch6)	育児情報 因子	第一因子	情報・公的援助 (inf1)
	第七因子	熱中経験 (ch7)		第二因子	親・友達 (inf2)
愛着因子	第一因子	親密型 (se1)	地域活動 因子	第一因子	ポジティブ (tk1)
	第二因子	不安型 (se2)		第二因子	ネガティブ (tk2)

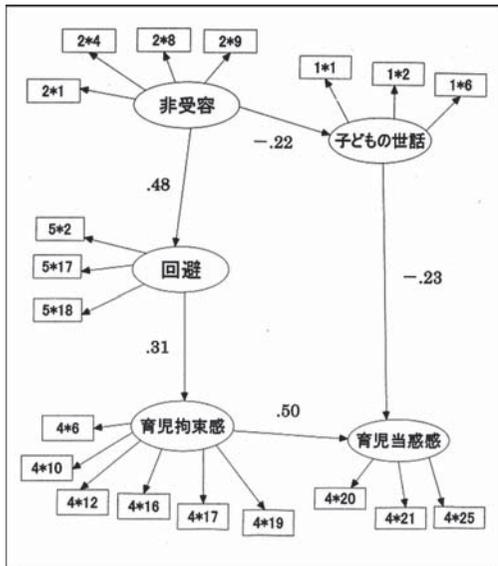


図1 母親の育児ストレス

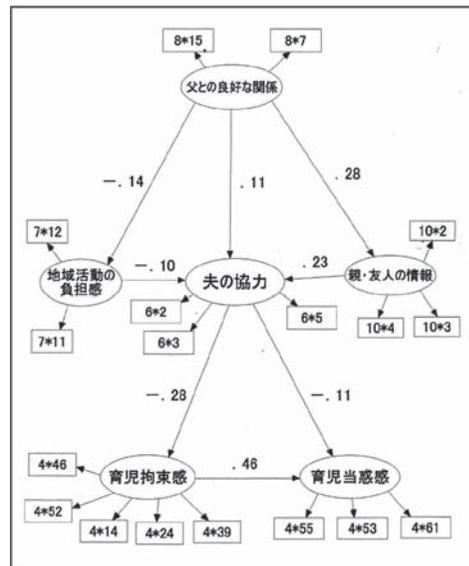


図2 母親の育児ストレス関連要因の構造

(3) 一人で育児する母親の背景

また、母親の育児生活の孤立度を検討したところ、父親との良好な関係、夫の理解・協力、地域活動の負担感、親や友人からの情報入手といったソーシャルサポートが関連していた。さらに、母親の子育ての生活状況（孤立状況）と母親の育児ストレス並びに母親の特性（成育歴・愛着特性）との関連を検討してみたところ、母親の孤立状況は、育児ストレス因子と関連が見られ、母親自身の成育経験（子どもとのかかわり経験や自身の熱中経験）や愛着パターンが影響を与えていた。すなわち、母親の成育過程において父親と良好な関係にあった母親は、育児において、夫からの理解や協力があり、地域活動への参加や情報の入手に積極的で、孤立度が低かった。こうした結果は、これからの育児を考える上で示唆に富むものである。

母親にとって、自分の父親との関係は過去のことであるが、そうしたことは世代間伝達される可能性があり、今育てられている子どもの父親との関係が良好であれば、その子どもが親になったときの育児に影響を与えるのではないかと推察される。それは、いま注目されている父親の育児への関与が、母親の子育てサポートだけでなく、良好な父子関係の形成を促すことにも重要な意義を持っているということである。つまり、母親の育児ストレスの軽減に夫の理解と協力が重要であるが、父親の育児参加と、祖父母を含めた世代間の関係性の視点から、そのあり様を捉えていく必要があることを示唆している。

3. 子育て支援プログラムや活動の意義の問い直し

(1) 養育性とは

すでに述べたように、子育て支援は、育児不安ストレスの軽減とともに親の養育性の向上

を目指すものである。

養育性とは、「相手の心身の発達や状態の改善に必要な態度、知識と身体技術」（陳、2007）あるいは「相手の健全な発達を促進するために用いられる共感性と技能」（小嶋、2001）をいう。養育性の形成と教育は、親たちが、自己のあり方を問い直しつつ、自己教育主体へと転化する機能をもつものである（陳、2007）。子育て支援は、そうした知識や技術、技能、自己変容する機会や場を提供する意義があるといえよう。

(2) 子育て支援活動の意義と成果

子育て支援の成果を検討した研究は、利用率や利用者の意識に関するものが多い。井野（2002）は、保育所と子育て支援センターの利用者の意識を比較検討し、保育所を利用している保護者は同じ年頃を持つ人には預けにくいと感じ、センター利用者は状況がわかっているから頼みやすいと感じているのではないかと推察している。センター利用者は積極性や好奇心がある半面、焦燥感を持っているのではないかと思われ、焦燥感をなくする支援が求められるという。また、野原（2007）によれば、園庭開放利用者は就園前の第一子を持つ親が多く、非利用者は「満足感」が有意に低く、参加者は「社会性」因子の得点が有意に上昇していた。このことから、園庭開放に参加することが、親としての自覚を促し、育児をポジティブに捉えることに寄与して、母親が孤立しがちな環境から抜け出す機会となっていると推論している。また、母親がどのような支援を求めているかを検討した中谷（2001）によれば、育児の楽しさを感じ育児不安の低い母親は、親としての成長と自立の機会を提供するような直接的経験的支援やサークルなど環境的で集中的な支援を求め、育児に楽しさを感じられず不安の高い母親は、遊び場、情報誌といった間接的支援を求めている。不安があると遠隔的なほうが返って気楽なのかもしれない。母親の心理的ウェルビーイングの維持向上から考えると、インフォーマルサポートが重要ということであろう。

(3) 母親の特性に応じた支援

これらの研究は、母親の子育てへの不安やストレス、困難感の個別性に応じたインフォーマルな子育て支援が必要であることを示唆している。それはまた、ソーシャル・サポートが個人の自己アイデンティティと深く関連することから見て、子育て支援活動に参加することが、「自己対象体験」（Kohlt, H., 1971）をもつ機会や場となり、育児の不安やストレスによって凝集性や収束性を失い「バラバラにされた自己」（Kohlt, H., 1971）が修復され、自己存在感や「これで良し」という自己肯定感を母親に与えるのであろう。

これまでの研究では、母親の完全主義傾向（三重野・濱口、2005）、児尊尊感情の低さや心配性傾向及びセルフエフィカシーの低さ（渡辺・石井、2005）、自己注目特性（興石、2005）¹⁴等の特性が、育児の不安やストレスを高することが明らかにされている。そして、将来に対する希望、現在の充実感、過去の受容を促す肯定的な時間的展望を持つことが、ストレスの軽減に繋がる（藤井・永井、2008）という指摘もある。また、母親としての役割を理解し、それを受容して役割遂行する自信があり、母親同一性の高い母親や理想の母親イメー

ジと実際の自己イメージにずれがなく、自己評価の高い母親は、育児不安やストレスが低く(山口, 2004)、自分の意図や感情を相手に正確に伝えるスキルをもち、夫からのサポートを強く認知しており、一方、感情統制するコミュニケーションスキルを有する母親は、育児不安やストレスが低いことも明らかにされている(石・桂田, 2008)。

こうした結果は、母親の育児不安・ストレスの軽減には、母親のパーソナリティ特性を配慮し、自分の過去や現在の受容と肯定的受け止めを促しながら、自己効力感や自尊心を高め、未来への展望がもてるようにしていくことの重要性が示唆される。また、母親自身が感情統制力やコミュニケーションスキルを身につけ、周りの重要な他者を自らサポート源にしていけるようにすることが不安コントロールにつながるであろうことも示唆される。

4. 子育て支援プログラムや活動構成と成果・評価の観点

子育て支援のめざす目的からすると、支援活動の展開の方略と参加者の意識変化だけでなく、母親のアイデンティティや養育性の形成の向上を図る支援内容、その成果や効果の評価、あるいは計画的な支援のPDCAについても検討する必要がある。保育の場では、保育の環境を生かし、独自に支援展開を考えることが多い。「ノーバディズ・パーフェクト」(Catano, J.W., 2002)に代表されるような、専門家によって標準化されたプログラムは別として、普段の保育の中で創意工夫するための視点の明確化が求められよう。

そこで、ここでは、筆者は、これまで行った研究結果(寺見・南, 2007a・b・c・d, 2008)をもとに、子育て支援における観点並びに支援過程モデルについて一考する。

(1) 筆者らのこれまでの研究結果が示唆すること

子どもの発達課題(基本的信頼感・自律性の獲得)と保護者の養育性の形成(親密性・生殖性の獲得)のキーとなるのは、親子間の愛着形成である(Erikson, E.H., 1950)。日常生活の中で子どもの世話やしつけ、あやし、遊びなどを通して親密な関係を形成することは、子どもにとっては安全基地を、保護者にとっては他者のために生きる自己の再成生の機会となる。したがって、本稿では、愛着、養育態度、ソーシャルサポートに視点を置いて論考したい。それは、筆者らの研究結果でも、その関連性が見出されたからである。

すでに述べたが、ここで、筆者らの研究結果を、再度、具体的に概観する。図3は、研究結果の概要を図式化したものである。この図に明らかなように、養育者本人の過去・現在・未来を見直した生涯発達の観点と育ちの循環性の観点の重要性が示唆される。

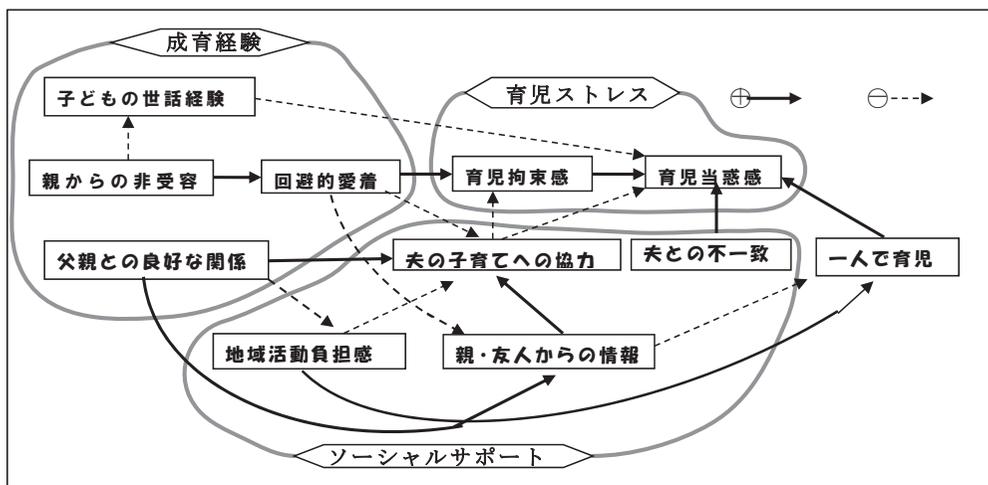


図3 育児ストレスの規定要因の関連図

<これまでの研究結果から>

- 親から受容されなかったという「非受容」感の高い母親は、人に「回避的愛着」傾向を示し、「育児拘束感」や「育児当惑感」が高かった。
- 親から受容されなかったという「非受容」感が強い母親は、子ども時代に小さな子どもの世話をするといった周囲の子どもと触れ合う経験が少なく、子どもの世話の仕方がわからない、子どもとの接し方や遊び方がわからないといった「育児当惑感」をもっていた。育児ストレスは、親からうけた養育のあり方と子ども時代の成育歴が関連していた。
- 「育児拘束感」は、母親の「回避的愛着」と関連していた。
- 「回避的愛着」は、母親の親の非受容的養育や親・友人・夫との関係の回避性と関連していた。
- 育児ストレスと育児サポートとは、以下のような関連が見られた。
 - ・「育児拘束感」は、「両親との相性の不良」、「非協力的な夫」、「夫の不参加」、「夫の親の援助のなさ」、「地域活動のサポート」が関連していた。
 - ・「育児情報」は「親・友達」、「もっと情報がほしい」と関連していた。
 - ・「夫との不一致」は、「両親との相性の不良」、「非協力的な夫」、「自分の親・きょうだいのサポート」、「夫の協力のなさ」と関連していた。
 - ・「育児当惑感」は、「父親の相性の不良」、「非協力的な夫」、「専門機関や地域支援活動」、「もっとほしい」と関連していた。
 - ・子育ての相談をする人は、「不安型」か「回避型」の愛着で、近くに預ける人のいない母親は、「子どもの世話」や「熱中経験」が低く、「不安型」あるいは「回避型」の愛着であった。
 - ・近所で立ち話のできる関係を持っていない母親も「不安型」あるいは「回避型」の愛着であった。

母親の孤立的状況は、現代社会の物理的環境の問題だけでなく、母親自身が「不安定」「回避的」な愛着を持ち、成育経験において「子どもの世話」経験や「熱中経験」の乏しさによる人間関係形成スキルが身につけていないとも解釈できる。それが育児拘束感を高めてしまうのかもしれない。ここで、注目したいのは、「父親との良好な関係」と母親の「育児に関する地域活動参への負担感」、「夫の協力」が関連し、育児情報源の「親・友人」といった媒介要因を介して、母親の「育児拘束感」と「育児当惑感」に影響を与えていることである。これは、父親が育児参加することは、母親のストレス軽減を超えて、その子どもが親になったとき、自身の子育てのストレス軽減につながる可能性があるということが推察される。

4. 育児ストレス軽減と養育性の向上を促す支援プログラムの枠組み案（試論）

母親の育児ストレス研究の先駆者 Belskey (1984) は、育児ストレスの規定要因の構造を図4のように示している。これを参照して、これまでの研究結果をもとに、支援の枠組みと支援経過モデルの試案を示したのが図5である。また、こうした要因構造の連鎖に介入し、自己変容を促す支援プロセス・モデルを示したのが図6である。

育児のストレスを軽減し、養育性の向上を促す方略として、自分の今を自分の過去（成育過程や被養育体験等）を捉えなおし、これからの子育てへの見通しを持つことに繋がるように、自分のいまを自分の過去・未来と統合させ、それを自己受容し肯定していく、そのプロセスに子育ての知識や技術を身に着ける機会を設けていく、といった観点から内容構成していくようなモデルが想定できる。その観点は、以下のようにまとめられる。

(1) 過去へのアプローチ

育児ストレス軽減と養育性向上を促す観点の1つは、母親の成育経験の振り返り、自身の親イメージを転換することである。自分自身がどのように育てられ、それをどのように感じていたか、内観法や回想法等の内観的なアプローチを援用するなどして自己洞察を深めるプログラムを構成し、親イメージをポジティブに変換する機会をもつ視点が重要である。

(2) 現在へのアプローチ

親子活動や触れ合い交流等は、多様なかかわりを通して親のコミュニケーションスキルを促進し、発達途上にある子どもとの共感的なかかわりを学ぶ場となる。相手に応じたかかわりに必要な知識や技術の習得と、感情コントロールの方略や親子の葛藤状況における関係調整やストレスコーピング方略を見出すように援助する視点が重要である。

(3) 未来へのアプローチ

親学習プログラムや子育て講座は、子どもの育ちや子育ての将来的見通しをもつ機会となる。母親自身の過去・現在・未来の再統合を促す視点が重要である。

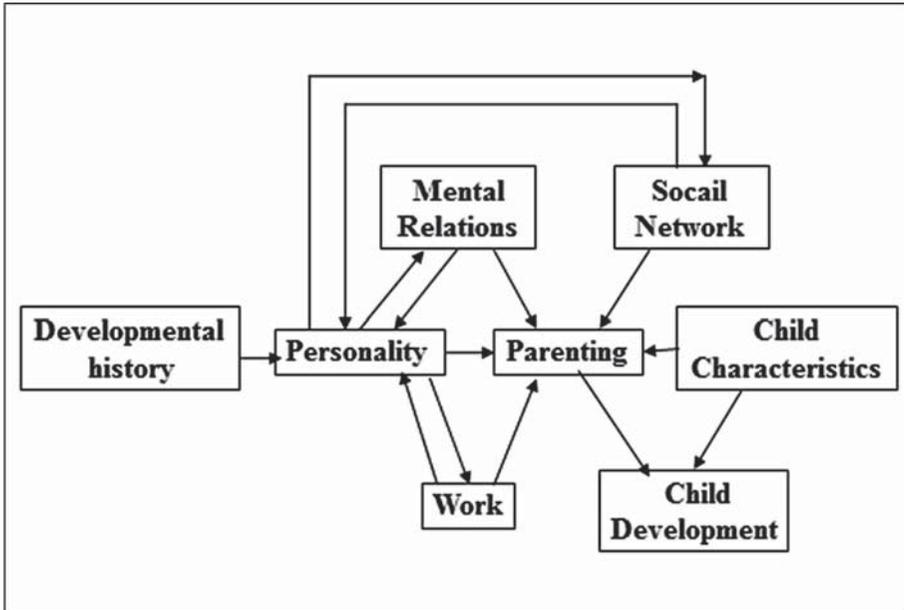


図4 Process model of the determinants of parenting (Belsky, 1984)

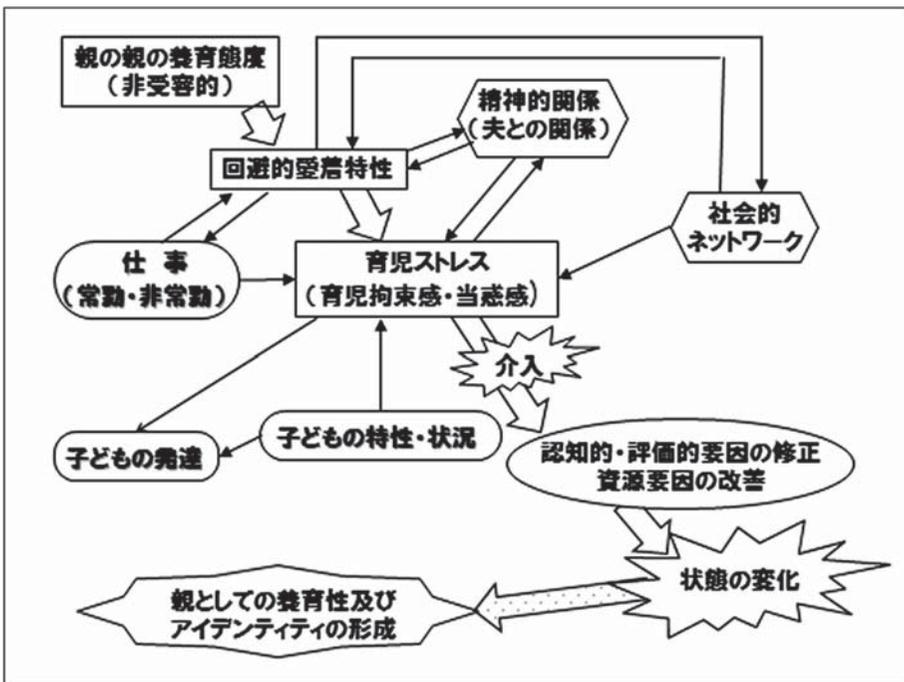


図5 支援の枠組みモデル

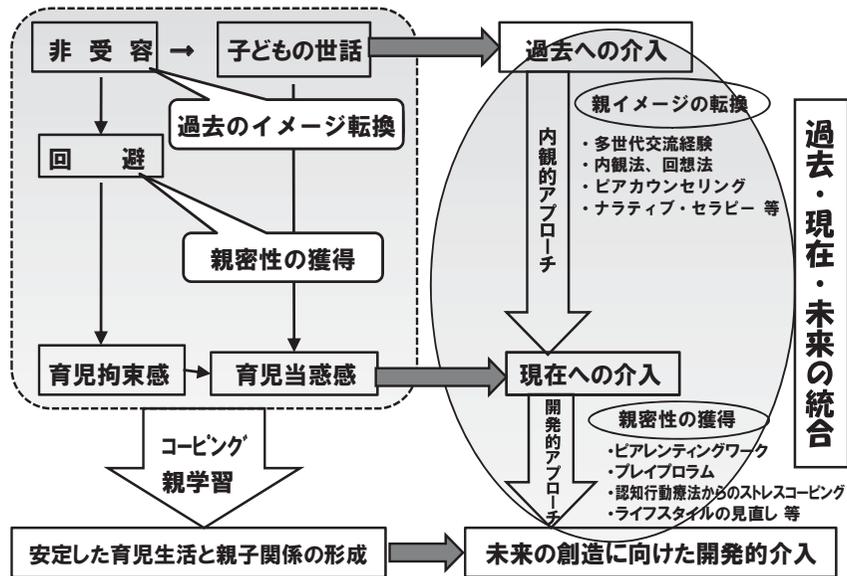


図6 育児ストレス軽減のための支援過程モデル案

(4) 理論的根拠と評価の観点の明確化

(1) から (3) で触れた支援プログラムは、すでに保育の場でも地域の子育て活動においても実施されている。本研究で示した枠組みや支援過程モデルは、これまでの支援活動に理論的根拠を提供し、支援活動構成を整理する観点として有用であろう。計画的な見通しのあるプログラム構成やその成果と評価を検討する観点として有効であると思われる。今後、その妥当性と有効性を検討する必要がある。

(5) 父親支援への有効性の検討

寺見 (2015) は、10年前の父親と今日の父親の家事・育児参加度を比較し、父親の愛着特性との関連を見た。その結果、家事・育児参加度は有意に向上しており、よく参加している父親の成育歴と愛着傾向との関連を検討したところ、母親と同様の結果であった。

このことから、ここで示した枠組みの試論は、父親にも援用できる可能性が高い。さらに父親調査から示唆されたことは、こうしたプログラムは個人に適用すると同時に夫婦、あるいは身近な養育担当者とともに実施し、相互に相手への評価を高めること、父親の協力は直接ストレス軽減につながると同時に、そうした関係性を形成する中で間接的な効果として期待できると考えられる。

結語

子育て支援において実体的なソーシャルサポートを充実させると同時に、さまざまな子育て支援活動の場で、母親自身のソーシャルスキルを磨くとともに、子育てを通じて、“いま”

の自分を超えていく経験の場として、スキルの獲得のみならず自己洞察を深めるプログラムの充実が求められる。

親の養育性形成を促す支援の視点として、親の自分の親に対するイメージの修復や子育て生活における父親や身近な人のサポートを整備し、安定した親子関係を構築する過程での親自身の現在を過去の経験と統合させ、未来の自己イメージを獲得することの重要性が指摘できる。

父親支援も、母親の育児ストレス軽減だけでなく、次世代の親の育成の基盤として重要であり、今後夫婦を単位とした支援を考えていく必要がある。また、母親性・父親性の枠組みやその養育性を、世代間循環の関係の系として捉え、世代間関係構築の中で形成される養育性として捉え、その支援のあり方を模索していく必要がある。

ここで提示したモデルは、これまでしてきた支援のあり方を見直す観点としても、またプログラム構成を考える観点としても、さらに成果の評価の視観点としても有効であると思われる。今後、実践的な検証を進めたいと考えている。

<倫理的配慮>

本論文で用いた調査研究の基礎データの内容は、被験者の人権に配慮して作成され、被験者からの合意のもとに実施されたものである。また、結果の処理においては、個人が特定されないよう統計的な処理を行っている。

<引用文献>

- Abindin, R.R. (1992). The determinants of parenting behavior. *Journal of Clinical Child Psychology*, 21, 407-412.
- Belsky, J., (1984). The determinants of parenting; A process model. *Child Development*, 55, 83-96.
- 陳省三 (2007). 現代日本の若者の養育性形成と学校教育. 北海道大学子ども発達臨床研究. 119-26
- Erikson, E.H. (1950). 仁科弥生訳 (1981) 幼児期と社会 I. みすず書房. 317-353
- 藤井加那子・永井利三郎 (2008). 育児期にある母親の育児不満感に影響する因子—子育て不安の認知の有無による違い—. *小児保健研究*. 67 (1). 10-17
- 井野よし子 (2002). 保育所と子育て支援センターの利用者の比較. 日本保育学会第 55 回大会発表論文集. 824-825
- 石曉玲・桂田恵美子 (2008). 幼児の情緒的・行動的問題にかかわる諸要因: 母親の育児不安と早期保育及び子どもの生活状態からの検討. *家族心理学研究*. 22. 129-140
- ジャニス・ウッド・キャタノ (2002). 親教育プログラムのすすめ方. 人なる書房.

Kohlt, H. (1971) *The analysis of the self*. New York: International Universities Press

小嶋秀夫 (2001). 心の育ちと文化. 有斐閣. 150-151

輿石薫 (2005). 育児不安の発生機序と対処方略. 風間書房

鯨岡峻 (2011). 子どもは育てられて育つ—関係発達の世代間循環を考える. 慶応義塾大学出版会. 36-37

牧野カツコ (1982). 乳幼児を持つ母親の生活「育児不安」. 家庭教育研究所紀要 vol38 493-499

佐藤達哉・菅原ますみ・戸田まり・島悟・北村俊則 (1994) 育児に関するストレスとその抑うつ重症度との関連. 心理学研究. 64 409-416

三重野祥子・濱口佳和 (2005). 完全主義傾向と子育て達成感・育児負担感との関連. 日本教育心理学会第49回総会発表論文集. 109

宮本政子 (2008) 乳幼児を養育する母親及び父親の育児支援に関する研究—育児ストレス構造の特徴と対処行動との関連—. 小児保健研究. 67-5

長坂典子 (2002) 家庭という密室での育児. 心の科学 N0.103 日本評論社. 50-55

中村敬 (2004) 育児支援ネットワークの構築に向けて—育児不安軽減に向けた取り組み. 小児保健研究. 63-2, 118-128

中村まゆみ (2008). 育児不安と母親の仲間関係—母親の仲間関係のサポート効果を中心に—. 尚綱学園研究紀要 A (人文・社会科学編). 2. 1-12

中谷奈津子 (2001). 子育て支援事業における母親のニーズに関する研究—母親の育児不安の観点から—. 日本保育学会第54回大会発表論文集. 440-441

中谷奈津子 (2006). 子どもの遊び場と母親の育児不安—母親の育児ネットワークと定位家族体験に着目して—. 保育学研究. 44 (1). 50-62

野原真理 (2007). 母親の育児に関する意識および行動の変化—保育所での地域子育て支援事業への参加をとおして—. 小児保健研究. 66 (2). 299-306

大日向雅美 (2002). 育児不安. 心の科学 N0.103 日本評論社. 10-15

田中昭夫 (1997). 幼児を保育する母親の育児不安. 乳幼児教育学研究. 6.

渡辺弥生・石井睦子 (2005). 母親の育児不安に絵教を及ぼす要因について. 法政大学文学部紀要. 51. 36-46

寺見陽子・南憲治 (2007a). 母親の育児ストレスの背景とソーシャルサポートの関連に関する研究 (5) —母親の自分の親との関係および育児サポートの関連について—. 日本教育心理学会第49回総会発表論文集. 213

- 寺見陽子・南憲治 (2007b). 母親の育児ストレスの背景とソーシャルサポートの関連に関する研究 (6) - 育児ストレス関連要因の構造分析-. 日本教育心理学会第 49 回総会発表論文集. 214
- 寺見陽子・南憲治 (2007c). 育児生活の孤立化と母親の成育歴並びに愛着特性との関連に関する研究. 日本保育学会第 60 会大会発表論文集. 644-645
- 寺見陽子・南憲治 (2007d). 母親の育児ストレス規定要因の構造分析—母親の成育歴ならびに愛着特性との関連—. 日本発達心理学会第 18 回大会発表論文集. 327
- 寺見陽子・南憲治 (2008). 母親の愛着傾向と育児ストレスの関連について. 日本教育心理学会総会第 50 回大会. 25
- 山口雅史 (2004). 母親同一性と育児ストレスの関連. 家族心理学研究. 18-1, 17-28.

付記：

本研究は日本教育心理学会第 49 回総会、日本教育心理学会第 50 回総会、日本保育学会第 60 会大会、日本発達心理学会第 18 回大会において発表した内容を総括し、加筆したものである。

(受付日：2017. 12. 11)